



武石憲貴(たけいしのりたか)  
1973年、秋田県生まれ。故・開高健氏の「オーバ!」に影響を受け、世界各地へ釣の旅に出る。ガイドに頼らず、見知らぬ土地で現地の人々と触れ合いながら手探りで怪魚を追い求めるさすらいの釣師。

パプアニューギニアの強烈な日に照らされ輝く銀鱗  
バラマンディ(学名 *Lates calcarifer*)

パプアニューギニア・ウェスタン州の州都ダルを飛び立ったプロペラ機は雲の中をフラフラと不安定に舞った。時折、雲の切れ目から眼下に大地が顔をのぞかす。隙間なく生い茂る深緑のジャングルを、お汁粉色をしたフライ川が蛇行している。しばらくすると大地は密林からあふれ出た水が削り成す広大な湿原へと姿を変えた。飛行機は徐々に高度を下げ、やがて小さな島に舞い下りた。そこは飛行場というにはなんともお粗末なただの草原である。飛行機から下りると、その島の住人と思われる真っ黒な人々に囲まれた。

数日、その島でのんびりと過ごした後、村のワニ猟師たちと共にフライ川の奥地を目指す。長さ約5メートル、大木をくり抜いただけのカヌーには乗員6人、1週間分の食料と調理器具などを詰め込むと、余分なスペースはほとんど残らない。体を少し動かすだけで左右に大きく揺れるカヌーに不安を抱かないわけではな

アジア 釣遊記

パプアニューギニア・フライ川

# 湿原の闘神

## バラマンディ

かったが、猟師たちの操船には全くといってよいほど迷いがなく、ただひたすら前に進んだ。やがて行く手は草木や倒木に覆われたが、ワニ猟師がナタを振り下ろすと進路の邪魔となるもの一切はあつという間に取り除かれた。時には水に飛び込み、カヌーを押す。僕はその筋骨隆々のたくましい背中をただただ見つめていただけだった。

結局、初日はほとんど竿を振らずに終わってしまう。夕暮れ時に3メートルほどもあるクロコダイルが水面に浮かんだ。小さな湖のほとりに切り倒した竹を柱にし、バナナの葉で屋根を葺いた。僕らはそこに蚊帳を張って眠りにつく。

そこから木々に空を覆いつくされた薄暗い水路をたどり、二日目にフライ川本流に行き着いた。川幅は優に500メートルはあるだろう。そこにはいくつもの小川が流れ込んでおり、これらは不思議と本流のお汁粉色とは異なる薄いブラックコーヒー



湿原での交通手段はカヌーのみだ

色をしていた。

その二つの色が混ざり合う合流点で、朝、釣りを開始して間もなくのことだった。第一投目、岸辺の水草に投げ込んだルアーは何の反応もなく船へ戻って来た。しかし、ルアーを回収しようと思ったその時、突然脇から黒い影が走り、炸裂音と共に水柱が立った。直後、目の前に現れた小さな虹。それに目を奪われる間もなく腕に強い衝撃が伝わる。咄嗟に竿を立てると水面を割って銀鱗の魚が宙を舞った。余りの大きさに船上は興奮にわく。魚はまるで弾丸のように川底へと疾走し、そして勢い余って岸際の水草群の中に飛び込んだ。力づくで引つ張り出し、船に引きずり上げる。恐る恐るバラマンディを持ち上げると、

ずしりとした筋肉質なボディの重圧が両手に伝わった。あまりの重さにただ笑うしかなかった。強烈な太陽に照らされ銀鱗が輝く。この一匹を釣るために経てきた数々の苦労、それらは見事に吹き飛んだ。



バラマンディにはルアー釣りが適する。淡水魚中屈指のファイターであるため、それ相応の道具が必要。お勧めは、竿「アマゾンフリップバリスタ(エバグリーンインターナショナル社)」、道糸「JIGGER8HG PE60lb(サンライン社)」、リールはその糸が100mほど巻けるサイズのもの。雨季の1月から4月は魚が水草の中に散るため釣り難い。フライ川へは首都ポートモレスビーからウェスタン州の州都ダルまで飛び、そこから小型機に乗り換えて川岸に点在する村まで行く。村に宿はまずないので、民家にお世話になるしかない。